

「西アフリカにおける諸部族の芸術文化に関する研究」

研究年度・期間：平成 10 年度～平成 12 年度

平成 10 年度

研究代表者：藪 亨
(教養課程 教授)

研究ディレクター：井関 和代
(工芸学科 教授)

共同研究者：下休場千秋
(環境計画学科 講師)

研究助言者：森 淳
(名誉教授)

研究補助者：篠田 暁子
(芸術文化研究科
博士前期課程)
上羽 陽子
(芸術文化研究科
博士前期課程)

平成 11 年度

研究代表者：藪 亨
(教養課程 教授)

研究ディレクター：井関 和代
(工芸学科 教授)

共同研究者：下休場千秋
(環境計画学科 講師)

研究助言者：森 淳
(名誉教授)

研究補助者：篠田 暁子
(芸術文化研究科
博士後期課程)
上羽 陽子
(芸術文化研究科
博士前期課程)

平成 12 年度

研究代表者：持田 総章
(美術学科 教授)

研究ディレクター：井関 和代
(工芸学科 教授)

共同研究者：下休場千秋
(環境計画学科 助教授)

研究助言者：森 淳
(名誉教授)

研究補助者：篠田 暁子
(芸術文化研究科
博士後期課程)
上羽 陽子
(芸術文化研究科
博士後期課程)

研究経過の概要

本研究は、研究メンバーによる過去 30 年以上に及ぶアフリカ研究（民族学、民族芸術学分野）の蓄積を基礎にして、西アフリカ諸部族の芸術文化に関する研究を目的に、平成 10 年度から平成 12 年度までの 3 力年間に行った。

研究メンバーは、各々の専門分野の視点から西アフリカの諸部族における芸術文化の特質を明らかにするために、蓄積されてきた資料のデータベース化を図った。研究分担として、研究ディレクター・井関は染織技術とその文化的背景に関する研究を進めた。共同研究者・下休場は住居と宮殿空間を手がかりに諸部族の環境文化に関する研究を行った。研究助言者・森は長年にわたり蓄積してきた西アフリカの土器を中心とする物質文化と民族文化全般に関する一次資料と研究成果をもとに、本研究全般に関する助言を行った。調査補助者の篠田と上羽は資料整理やデータベースの作成作業を担当した。

西アフリカには文化的に多様な部族社会が存在するため、それらの部族間の比較研究や文化圏研究がメンバー内で必要とされた。そのため既存の現地撮影スライドをフォト CD 化することにより、研究メンバー相互において容易に情報の共有化を図るためのデータベースを作成した。この過程において、研究助言者・森から西アフリカの芸術文化に関する数多くの貴重な資料と情報の提供を受けた。さらにフォト CD 化した画像データと共に、研究メンバーが過去に発表した論文等のリストを作成し、既存の文献資料整理と分析、併せて現時点での研究課題のより明確化を目指して、諸国に居住する部族社会に伝承される民族芸術の社会的・文化的特質、特に物質文化としてその技術的考察を行い、それらの技術を支える社会的・文化的背景と

しての精神文化に関する考察や、さらに観光者の増加や自然環境の破壊などの現代社会における諸部族を取りまく新たな状況における民族文化や民族芸術の存在価値について考察した。

研究成果

本研究において作成したフォト CD の主な内容は、次のようなものがある。

マリ国 / ドゴン族 / 風俗 (M)・織作業 (I)・住居 (S) フルベ族 / 織作業・染色作業 (I)
ボゾ族 / 藍染め (I) バマナ族 / 泥染め (I) ジェンネの定期市と住居 (S)
モプチの住居 (S)

トーゴ国 / モバ族 / 成女式・成人式・葬儀礼 ロツソ族 / 喪明け儀礼・悪霊祓いの儀礼 (M)
タンチグの土器作り (M) ミナ族 / 藍染め (I) コトコリ族 / 織作業 (I)

カメルーン国 / 自然遺産・グラスランドの宮殿 (S) ティカール族 / パフツの王宮・アニユアル
ダンス (S) パメッシング宮廷儀礼・土器作り・喪明け儀礼 (M)・住居 (S)

ガーナ国 / アシャンティ族の土器作り・錬金とビーズ作り (M)

セネガル国 / マリ国 / ギニア湾沿岸諸国の歴史遺産 (S)

ナイジェリア国 / ハウサ族の藍染め (I) など (M = 森、I = 井関、S = 下休場)

これらのフォト CD にみる伝統工芸・宗教儀礼・生活文化に関する映像は、西アフリカの諸部族の民族文化の特質を示す貴重な研究資料である。これらは研究メンバーの情報交換に活用するだけでなく、アジア・アフリカ研究室蔵の研究資料として公開し、本学が日本におけるアフリカの民族芸術の研究拠点の一角となるべく、少しずつではあるがデータの整備を進めている。またデータ化された資料やそれらの内容を共同研究会において分析し、各メンバーはその研究成果について、幾つか発表することができた。その主なものは次の通りである。

井関は平成 10 年 3 月、国立民族学博物館の共同研究において「ニジェール川大湾曲部における織師の調査報告」、同年 11 月、民族藝術学会例会（於：国立民族学博物館）において「カメルーン染織の現代の動向 藍染め絞り布を中心に」、平成 11 年 10 月、第 41 回意匠学会（於：成安造形短期大学）で「西アフリカの織機 - その変遷と布産業」、平成 12 年 2 月、大阪芸術大学芸術研究所・教員研究発表会において「西アフリカの布 - マリ・フルベ族の織技術を事例に - 」など、各テーマで研究発表を行った。また『別冊 太陽 2000 no.32 アジア・アフリカの古布』に「アジア・アフリカの染織 - 祖霊を包む布 - 」[平凡社]を掲載した。一方、平成 12 年度、大阪芸術大学に博士論文「西アフリカの布 - サハラ以南の織布、その技術的考察」を提出し、さらにこの論文をもとにし同年 12 月に塚本学院出版助成を得て『アフリカの布 - サハラ以南の織機・その技術的考察』[河出書房新社]を出版した。これらの様々な研究発表の中で、井関は西アフリカの布・織技術の考察を行い、諸部族の伝承する織技術を詳細に分析、また繊維素材や織機、織技術の起源についても研究を進めた。特にアフリカの人々の樹皮布やラフィア布に対する根源的意識について王制社会との関係から考察を行った。さらにアフリカ各地の原始

機と足踏み式機について、諸部族に関する調査資料をもとに、アフリカにおける布の存在理由を埋葬布にあるとし、そして11世紀の古マリ帝国のイスラム化に伴い特定の織技能集団(Dioula)の組織化がなされ、その後の王国の衰退とともにイスラム化した商人集団(Dioula)となって、西アフリカ各王国に足踏み式機を普及させたという論考を発表した。

下休場は平成10年4月、民族藝術学会第14回大会(於:大阪大学)において「カメルーン共和国におけるエコツーリズムと民族芸術」、平成11年11月、国立民族学博物館の共同研究会において「異文化理解とエコツーリズム」をテーマに、カメルーンにおけるティカール族を事例を中心に研究発表を行った。また、平成11年3月、『エコツーリズムの世紀へ』(エコツーリズム推進協議会発行)に「エコツーリズムのすがた・カメルーン」を分担執筆した。さらに、国立民族学博物館調査報告21に「自律的観光と民族芸術 - カメルーン共和国の事例を中心に - 」、同23に「エコロジカルプランニングの思想とエコツーリズム」を報告した。

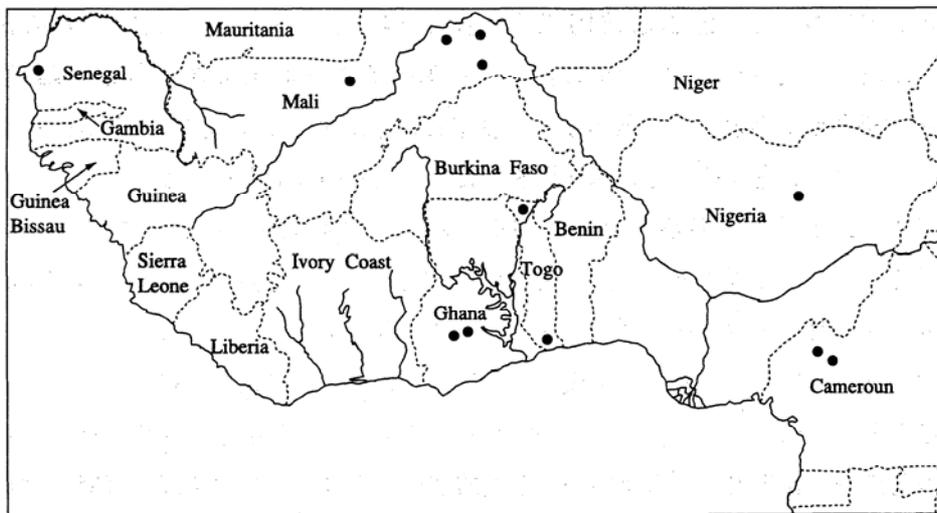
森は平成12年3月に守口市や13年1月に奈良市においてドゴン族の展覧会を開催。また高砂市青年会議所、帝塚山学院高校等において講演を行い、広く一般社会人や高校生をはじめとする若者達にアフリカにおける民族文化の特質についての情報提供活動を行った。

本研究ではこれまでに蓄積された調査資料をフォトCDのかたちでデータベース化することにより、研究メンバー間の情報交換が活発化し相互理解をより深めることができ、それが各自の専門分野における研究成果としてあらわれたといえる。また、伝統工芸を主とする民族芸術とそれらを取り巻く自然環境や空間といった環境文化には当然のことながら密接な関係がある。この研究により民族文化を民族芸術と環境文化との関連性において捉えることの有効性を確認することができた。

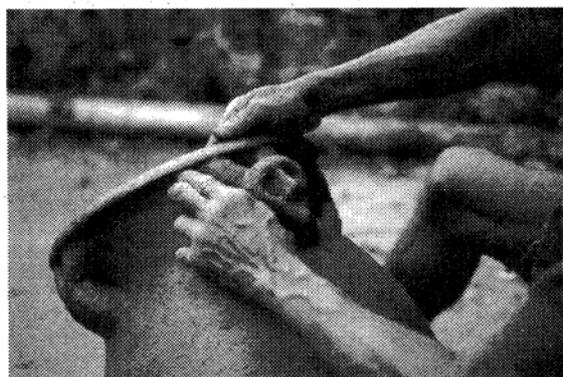
今後の展望

これまでの西アフリカの文化形成は、部族社会を基本に、多様な民族文化が形成されてきた。本研究では、これらの社会の近代化と共に急速に変容し失われつつある貴重な諸部族の文化的特色の一部分を具体的に明らかにできたことに、大きな意義があったと考えられる。しかし、伝統社会に生きる人々が現在、社会的・経済的・文化的・環境的に直面している近代化の圧力に対して、どのように対応しそれによってどのような新たな文化が生まれようとしているかについての考察が今後必要となろう。

また、本研究では把握しきれなかった西アフリカにおける他の諸部族や、さらにはアジア諸国の民族文化との比較研究も行いたい。アフリカ・アジアの民族芸術に関する研究機能を充実するために、より一層の調査研究と既存資料のデータベース化を図り、関連する学会や国立民族学博物館をはじめとする学外研究機関との共同研究や海外の現地研究者との学術交流を積極的に進めて行く所存である。(下休場 千秋記)



地図 西アフリカ（・はフォトCD化した地域）



カメルーン・ティカール族・バメッシングの土器作り（森淳撮影）



マリ・フルベ族・ゲンベの羊毛黒染（井関和代撮影）